

-
- 特集「大学における人間性教育の試み」
自文化における生命論的パラダイムシフト（覚書き）

体験学習法による生命と論理

－「いのち と ことば」というカリキュラムの実施－

まどか 蛭 田 庸 代 （南山短期大学）

[キーワード:いのちとことば、Japonologie:和学 日本学、Holistic universal human life education : ホリスティック人間観、生命論的パラダイム、大学教育生涯学習カリキュラムとしての体験学習法、日本語による医の論理化、生命に関する学問教育文化の風土化、自己統合化、内在型学問形成]

I 序

本学において、日本で初めて「人間関係」を呼称する学科が誕生し(1973)、「体験学習法」による学習研究共同体として、関係論やプロセス重視の教育的学際的冒険が開始された。

人間関係「学」科ではなく、あえて「学」を外して人間関係科と称した本学科は、創設当初から「学」や「日本における高等教育・研究」に対する発想転換を実践的に探究するスタッフ・Facilitater（教職員のことを本学ではそう称す）および各年度の学生とフィールド社会（主として養護学校や老人施設）を構成員と捉える教育風土である。共に「体験学習」という「プロセスから学ぶ学習法」によって、科全体の営みを学習共同体Learning Communityと見なして、その人間関係の中に生きる個々の学習者が人間的に成長することと、人間及び人間関係についての真理探求することとを統合する教育の実現への試みが始まったのである。(人間関係研究センター CATALOG Vol.10,1997)

ここでは、次世紀へ向けての現代人の「人間性の教育」という視点から、西洋暦30世紀に入る21世紀、価値システムの変動・創造期に、社会の行動的変革子Chage Agentとして、現代日本人の生命（倫理）観や、自文化の言語化・意識化という大学での共育カリキュラム、及び「直観」を育むようなホリスティックな人間性探究の教育を検討する。

更に、いのちをテーマとする生命の科学life scienceにおいて、コンテンツレベルの情報知識提供型ではない、自己のプロセスを重視した、且つ、日本人の生命観という文化形成を伴う学問Science教育のもう一つのあり方として、筆者が人間関係科カリキュラムの関連性の中で試み、学生や自己の創造性の開発を通して授業化したワークショップ形式の「いのちとことばLife Fantasy」のシラバスも報告する。

これらは、直観力や霊性、精神性をもはぐくむホリスティックな人間性教育として紹介したい。

Ⅱ Life Science と Life Fantasy

Ⅱ-1 「出会う」認識法と大学での人間性教育

人間性探究の自由な思索教育環境に求められる認識法や思考法はカリキュラム作成にそのまま反映する。

ひとの生命を対象とした学問は、20世紀後半、近代科学において生命科学という領域を形成した。これは、日本においては分子生物学（的方法）を中心に、西洋近代科学での原子論、機械論的生命観を基礎とした要素還元主義のライフサイエンスに留まり実質発展した。生命科学の学問領域としての新しさには、当初、「自然科学の統合化」だけでなく、人間の生命活動全般に亘る社会科学・人文科学・自然科学・宗教倫理に及ぶ包括的学際的なディシプリンが期待された。いわゆる、「科学的方法論 +アルファ」の方法論を探究することで、広義の「生命科学、人間科学」の現代学問形成のあり方が問直されたのである。

その後、バイオテクノロジーBio-technology,および生命倫理Bio-ethicsという名称により、生命科学の科学技術面と神学（キリスト教、最近では仏教も）及び法学医療現場を中心とした倫理的側面の研究や問題提起が行われ今日に至っている。筆者は、生命科学の「+アルファ」の方法論、認識論を実践的に探究することを通して、広義の生命の学をLife science & Life Fantasy「言相と幻相」と相補的または包括的holisticに捉え、「+アルファ」は、自己の生命体験における真理（または自己）実在と「出会う」という認識法をとるものと考察した(Madoka 南山短大紀要1997)。

表1 ひとの生命を対象とする研究相

HUMAN LIFE	
FANTASY	SCIENCE
幻相	言相
出合う認識法	実証的認識法
生命論	生命科学
非言語トレーニング	言語トレーニング
自己内統合化	対象の分析総合化
プロセス重視	コンテンツ業績重視
自己評価法	教師等による他者評価法
教えない教育	教える教育
Facilitater	Teacher/Professor
場・環境づくり	課題の教授
正解のない答	正解のある答
一過性のいのち	一般性ある対象
仮定法	帰納法・演繹法

II-2 非言語的non-verbalと言語的verbalトレーニング

-Meditation Imageワーク と Discussion能力-

近代西洋中心の教育を受けた現代人や、その教育影響下にあった学生は、知識情報を外から受け取る学び方は習慣化し、身につけている。一方自分自身の気づきの「表現力」や「創造力」「想像力」をつかうプログラムには慣れていない。学習法、もしくは自己への問いかけられ方が、その人自身の内からのことばに聴くことが少ない。身体構造や心や気持ちの向け方も、IMAGE や FANTASY に対応し易い状態がある。獲得した既存言語scientific termsによる生命観の言語化（言想）に対して、IMAGEや FANTASY によって探る自己の生命観の言語化（幻想）を試みる。

そのためには、awareness と knowledgeとの働きの知的獲得のバランスを取り戻すトレーニングプログラムが、協力者の中で創意工夫し試行されつつ開発していくことが必要と考える。

このようなクラスでは先ず「想像力」や「自らに聴く」こと、自分の内なる中心を身体感情インスピレーションの動めくままに探る。または、自らの内なる重心に身を任せて生きてみるということに重点をおく。答えが「教師側やテキスト内」に代表される「外側に隠されている正解」があるのでなく、自分側にあると前提する。外的知識で規定された物があるのでなく、正解があるのでなく、いまここで生ずる自己内現象全てに、命に纏わる答えが潜んでいるこ

とを前提とする。

その本人によるその解釈や分析は次のステップで行われることが望ましい。しかし、半期だけのクラスでは、先ず「自らのなかにimageやfantasyなどの現象が自由自在に起きたりそれに気づく楽しさや自己の生命感受性」を意識化してもらおう。これは生命・いのちという視点で自他の人間性に出会うトレーニングともいえる。自分の生きている内的重心が何に何処にどの様に在るのかに気づいていく参加者もいる。何も感じない人もいる。

さらに 日本語の響きと自分のことばや思いの響きに敏感になることで、生きている自分や外界の生命体への気づきを体感していく。

Ⅲ 教育パラダイムシフトの一方法

Ⅲ-1開放系でなく 閉鎖系としての「体験」学習法

(Laboratory method)

体験学習法という教育方法は筆者自身が南山人間関係科でのスタッフ生活で担当科目「人間中心の教育」や「人間関係原論」及び人間関係研究センターや社会教育プログラム開発でのチームティーチング（専門領域を異とする複数の教員によるプロジェクト型クラス構成）やスタッフミーティングを通して学生共々養成されチャレンジしている方法である。

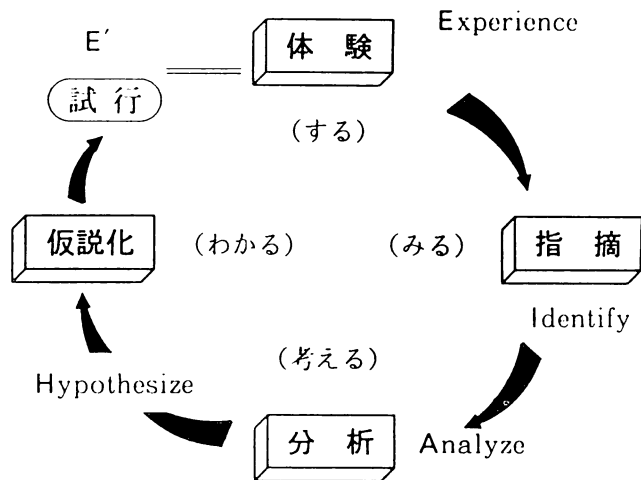
体験学習法Laboratory methodについては日本に紹介した柳原（立教大学キリスト教教育研究所元所長）、R.メリット（南山短大人間関係科初代学科長）らによると「ラボラトリー方式による学習とは、そこ（ラボラトリーまたは研修）に設定された主題（学習目標）の本質と方法を、体験的に、主体的に同時的に追求する教育（教授・学習の相互作用）の方法である。」（1976）その後、短大生大学生社会人高等教育機関での二十年間の実践の中で現代的意味や社会的ニーズが医学医療者教育、教師教育、学校会社家族の人間性教育、科学的教育等と相補に生じている。そこに「モノ」でなく人間がいるという意識を伴う体験学習は生涯学習そのものだからである。

体験学習は閉鎖系の体験学習法と開放系のそれとがある、と筆者は捉える。つまり、人々はあらゆる体験から何かを学んでいるので、人生そのものが広義の体験学習の場として全ての人に開放されていると考えらる。しかしこれを教育体系化し、一つの教育方法、及び、人間の原理の研究探究法としているのが高等教育機関での閉鎖系の「体験学習の循環」である（図1）。単に経験を提供したままではなく、また、本人の経験を「いったいそこに何が起こったのか」意識化仮説化して次の行動体験にチャレンジする。自己の行動療法 行動科学を基礎としている。その成立過程には、神学教育においては「神学知識のみでなく地域のリーダーとして行動できる司牧者養成」に端を発し、教科内容

(subject matter)や理論の応用としての実践(experience)ではなく、自らの体験(experience)が意識化され言語化仮説化(generalize)されることで一つの教科内容に相当する価値観(subject)が創造され得るという、徹底した人間性信頼の学習法である。

多くの場合、学内授業では「実習(structured experience)」、「ふりかえり用紙 (process シート)」記入、グループ内での分かち合い 小講義という構造をとる。総合科目「女性論」(1980-1995)「生命論」(1986-1995)「人間関係論」(1988-)は体験学習法による一般教育科目で、人間関係科のリソースを人的にも教材教室(絨毯100平米の自由空間)等物的にも取入れ合流した。

図1 体験学習の循環過程 (HOSHINO)



「人間関係トレーニング」(ナカニシヤ出版)より

III-2「仮定法」による大学教育

現代の大学教育は現在在職中の教職員がどのような教育を受けたかに負う。近代(化)教育や学問は'科学的'記述や思考の修得にあった。その思考方法は八木秀二郎(Creative science1997)によると、未来予測法には、虫の眼と鳥の眼の見方がある。前者は演繹法(大前提-ケース-結論) 帰納法(ケース-結論-大前提)で近代合理主義的思考法をなした。後者は仮定法(結論-大前提-ケース)で近年重要視されている。これは所与の法則・原理に依存せず、個別事象の積み上げデモなく、全体の構成を大掴みに把握し、論理の筋道を「仮説」として設定しその仮説を検証して行くことにより、個別のケースに当てはまる大前提を明確化しようとするものである。

この「仮説法」は、体験学習の循環過程では 自己の「仮説」から次の体験へと試みを繰り返しつつ自己確立していく学習法と力点が似ており、生命論においても有効な思考法と思われる。

Ⅲ-3価値の明確化

大学では「ものの見方」を育てる。自分が或いはその時代がどのような価値規範の中で生きているか。大学人が、どのようなパラダイム(T.Kuhn)、考え方の枠組みの法に沿って生きようとし、研究教育風土を通して育てられようとしているのか。その法を守る生き方と、その法の限界に気づき勇気をもってそれに従っていた自分とその法を尊重しつつも脱却し、創造する生き方が生涯に渡ってできる、新しい社会人の素養身につける場を、大学教育研究機関と捉える。その原動力は教職員と学生の人間としての意識の尊重であるが、そのためにはそれを守る環境づくりの工夫がいる。

大学キャンパス・教室と呼ばれる空間や、カリキュラム・時間割という時間の設定の法にも守ることと破ることが必要である。challengeし、自らの環境や社会という自分との人間関係をchangeしていくダイナミズムが、大学教育現場に生まれていれば、それが「大学教育環境」づくりが自然に行われているといえるのではないか。

ものの見方やものは、そのものを「物」とみれば物理科学的法が、「者」とみれば人間的法が、「もののけ」とみれば霊的魂的法が、という階層レベル別の研究をしつつ大学での学科構成、科学領域、科目の構成を可能にしている。「人間性」はその全てのものを統合した関係性と捉えると、大学教育に期待される人間性探究は、通常科学領域別科目を越えた「科目」づくりである。

「通常科学の総合」科目ではなく、各人の「自己統合化」科目である。多くの総合科目は教員がテーマや講師陣をコーディネートするが、生命論など、自己統合型プログラムは学生自身が個人またはグループでテーマや講師または資料を収集総合化し、正にコーディネートのプロセスや選択決定行為の中で自身の価値基準を言語化論理化し、授業で研究発表するのである。

Ⅲ-4対象化と一体化

教育学と教育、神学と信仰が区別されるように、人間関係科では人間関係「について」研究「対象化」して分析的要素還元主義という意味での科学的教育を教授するのではなく、そこに息づく人間関係「を」学び生きることが大切にされる。即ち、その人の気持ち「になる」、「ふれる」、「一体化する」という表現のように自分や他者や事物の知り方・認識方法が異なり、研究主体subject客体object一体性のものである。

生命や人間をテーマとする研究学習(étude)領域においては、筆者はこのような認識法を「出合い」、「かかわり」の認識法と名付け、これを、通常科学の

atomism中心の、いわゆる要素還元主義・機械論的・分析的方法とによる認識法と相補的に区別した。脱近代化post-modernやパラダイムシフトの行方を模索しているかのように見える現代社会において、生命論研究や大学カリキュラムや会教育・生涯学習においては「生命論 いのちとことば 人間関係論 人間論 生命倫理 医師医療者教育者教育 創造性開発 自己知と自己表現、和学Japonologie」という科目や視点を実現実施している。

従って 以下の生命論プログラムにおいては、教師学生共に自己内在型学問形成の過程を学び生きる（自己生命体験の論理化）という自覚がLearning communityとしてもたらされる。

IV生命論による人間性探究と生命論型パラダイムシフト

IV-1体験学習法による生命論シラバス（資料1,2）

西洋近代自然科学による医学医療や学問方法を現実的には補う、または相補し合う学問システムが、検討される時代を、日本の学問社会・科学者社会は迎えているのではないか。日本人の移入型だけでない自律型の学問形成は、「生命」論においては重要な課題である。「いのち」の営みに関する領域でどの様に行い得るか？これが、筆者の「体験学習による生命論」、人間関係科のもつ自己体験中心の手法による「生命の体験学習」を試みる所以である。

生命論または「いのちとことば」の学習者にとって、その学習法は教師からの外からの教授ではなく、正解のない答の一つでない自己からの内在的自己探究であり、自己との出合のひとときである。自己文化風土の意識化が直接日本語による生命論の論理化につながる。

これは、生命の科学的論理的研究教育に留まらず、日本人の生命観人間観医療観や文化的側面も意識化しながら、直観をはぐくむホリスティックな人間性教育と捉えることもできる。

生命倫理は「関わり医療」の対話の中で創造される価値観の体系化が問われる。生命倫理のテーマ各論総論を、人間関係科の体験学習法を取り入れて大学教育で試みた例は少なく、本学の「生命論」発足(1986)は全国にさきがけていた。また、南山大学総合科目「人間論」において「生命と論理」というテーマで、体験学習法による生命科学基礎論及び生命倫理各論のプログラム開発を実施した(1989-1995)。

IV-2生命論におけるの発想転換（パラダイムシフト）の視点

視点(1)研究主客一体型の生命論：

人の生命を対象とする学の科学方法論上の大きな特徴は、研究客体（対象

物)がひとの生命(いのちある人)であると同時に、研究主体(研究者)がひとの生命(いのちある人)でもある、というように研究主体と客体が同一という点である。

視点(2)自己知・自己論としての生命論：

「自分論」という着眼点はおそらく人間論を学問領域に組み入れることにより、あらゆる科学・学問領域で起こるだろう。これは発展的な意味で、「専門家たちだけの学問社会体制の自己解体」を意識的にも組織的にも必要とされる現代の兆しであろう。生命論では学問・科学における「自己」の位置づけが問われる。

視点(3)生命医療場面での日本語による素直な自己表現assertiveness と価値の明確化をねらう生命論：自文化形成となる生命論、日本語による学問形成。

視点(4)生命論におけるいのちの認識法の特徴：

からだ からの ことば (Body-spirit-soul)

身体からの言葉、身からの思い、いのちからの叫び・・・日本人の感覚や観念から出発した当事者本人の知的体系の整理をとうして、日本人の認識のあり方、納得や落ち着きどころは何処かをさぐる。これは西洋心身二元論中心の科学者共同体の制度的知的体系とは区別する。

以上、生命論プログラム、殊に和語(和学)を意識した「いのちとことば」を手掛けつつ、生命論のもたらす研究教育における視点の新しさをいくつか挙げた。大学教育または生涯学習における人間性教育・研究の営みが、19世紀開国以来の近代化政策・学制という名のもとで要素還元主義による機械論的科学教育研究枠に留めるだけでなく、人の生命、いのちあるものとして、相補に生命論的パラダイムへの発想・意識転換の一風土・場づくり・生命環境となることを期待したい。

参考文献・資料

- まどか庸代 (1997) 「言相と幻相－日本人の身をもつての生命論&出合うという認識論」 南山短大紀要 Vol.24, p161-180
- まどか庸代 (1992) 「医療技術社会での Life STS－日本人の生死論と自己表現トレーニング」 日本科学教育学会研究報告Vol.6 No.5 p.47-50
- まどか庸代 (1989) 「宗教人と科学人の対話－進化論論争教授会論争にみる発想法の異文化」 人間関係 Vol.6, p115-125
- まどか庸代 (1990) 「生命科学基礎論へのもう一つのアプローチ」 上智大学 SOFIA LIFE SCIENCE BULLITIN Vol.9, p81-90
- 関根秀和 (1982) 「自己の発見」 一般教育学会誌 Vol.4(1), p70-78
- 津村俊充、山口真人監修 南山短大人間関係科編 (1992) 「人間関係トレーニングブック」 ナカニシヤ出版
- 柳原 光、星野欣生他編 (1982) 「Creative Organization Development 人間のための組織開発シリーズ Vol. I－IV」 (Press Times)
- C+Fコミュニケーションズ (1989) 「パラダイムシフトブック」 日本実業出版社
- M.Mitchell WALDROP (1992) 「COMPLEXITY」 田中三彦、遠山峻征訳 (1996) 「複雑系」 新潮社
- イリヤプリゴジン他編 (1994) 「生命論パラダイムの時代」 ダイアモンド社

資料1) 幻相編：いのちとことば LIFE FANTASY/VISUAL IMAGE
シラバス人間関係科各論 workshop 「いのちとことば」 1995後期

- 1) オリエンテーション LIFE SCIENCE と LIFE FANTASY
- 2) いきのいろ：CHAKRAの音と色（波）
- 3) たましいのいろ：O-RING 法（Dr.Ohta）
- 4) いのちのかみ：喜怒哀楽の自己表出と自己表現
- 5) いろはの本音：平仮名の音と身体の響きと漢字イメージのずれ
- 6) いのちのはし：墨 筆 思索の一体感
- 7) ことばによる素直な自己表現：assertion training 心と言葉の一体化
- 8) つき ひ：月と太陽のイメージの体感。自身の由来本来への回帰
- 9) ことばとイメージ：言と幻
- 10) 象歩による集中力トレーニング
- 11) HIGHER SELF：大いなる自己への旅
- 12) 面談

資料2) 言相編：生命論 LIFE SCIENCE/BIO-ETHICS

シラバス南山大学総合科目「人間論：生命と論理」1995通年

Madoka M.Hiruta 実習資料：Creative O.D. (Press Time1982)

- 1) オリエンテーション 実習：生命の旗 講義：自己内在の生命観 総合科目と自己統合化
- 2) 生命体からのメッセージ 実習：対人関係図 ボディワーク 講義：自己開示
- 3) 出会いのころみ 実習：Pairing 対面を生かす創意工夫
- 4) 生命史からのメッセージ 実習：自分史を書く 講義：自己化意味化
- 5) 生命体間の関わり 実習：おもしろ村 講義：問題解決/プロセス/気づき
- 6) 生命体間での自己知 実習：聴く話すみる 講義：Awareness & knowledge
- 7) assertion training 実習：いき ロールプレイ法 わたしらしい言葉
- 8) 生命の論理 いのちあるもの おとこおんなの論理
- 9) asserthion training 実習：コンセンサス価値観 言語によることば
- 10) assertion training 実習：non-verbal communication いのちの視点
- 11) 生命論4つの視点、生キル産ム看トル死ヌいのちに「私ならこう答える」
- 12) ライフサイエンス生命科学の試みる発想法
あなたにとっての「いのち」の課題/自己論理（前期レポート提出）
- 13) 生命倫理と大衆論理と自己論理
カレンの死及び現代生命医療技術倫理と社会的コンセンサスをめぐって
- 14) コンセンサスを求めるグループ研究開始「生命倫理各論」
- 19) 発表レジュメ最終仕上げ
- 20) グループによる研究発表開始
レポート・ファイル課題確認
- 25) 公演・全体討論 LIFE SCIENCE & ART

資料3) 学生の反応：‘ニンカン科目と自己成長’「人間関係通信」No.36,
P5 (1998, 3)

いのちの存在の仕方、学問としてのアプローチ法の特徴にふれる

- ① いのちへの感受性。もの・ころろ・たましいの一体感に気づく。
- ② ^{ステップ}個と ^{学生}個が異質文化・世界・生命体（個性）として衝突し、その人自身の
個の確立又は目ざめにつながる（ある種のカルチャーショック）。

つづきのつづき

命とことば

2年 佐藤 洋子

私たちをとりまくこの世界には、いろいろなものが存在しています。命を持つもの、命を持たないもの、目に見えるもの、目に見えないもの、ありとあらゆるものが同じ世界に共存しています。ところが悲しいことに、私たち人間は、どうしても、自分たち人間を中心に世界を見る傾向があります。ところが、命を持つのは人間だけではなく、人間という視点にとられることなく、人間を含むこの世界のいろいろな命を感じていきます。極言するならば、一般的には命を持たないとされている物にも、命があると考えます。物にはそれを生み出した人の心と、その物が生まれてからの歴史が、私たちの体と同じように宿っているからです。それらの「命」が語っている「ことば」は、言語によるものだけとは限りません。ときには沈黙ということばであるときもあります。またこの授業では、目に見えないものだけでなく、目に見えるもの、「命」というものは、

目には見えないものです。目には見えないものは、この世に存在しないものだ、目には見えないものは、特殊な能力のある人しか見ることができないものだということ、私自身は過去に何度か聞いた経験がありますが、私たちが心を閉ざすとすれば、だれにでも見られるものなのです。その見え方は、人によって異なるものなので、

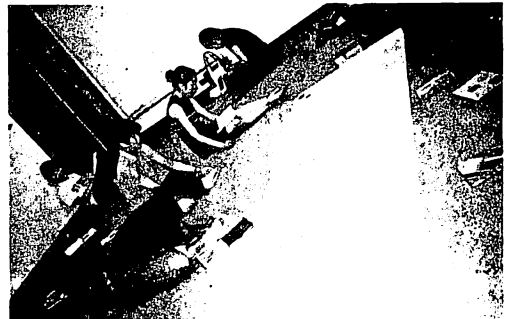
は、無意識の世界に質問をすると言ってもよいでしょう。私自身、この実習を始める前は、自分が意識していないのに筋肉がいろいろなことを語るといことが信じられませんでした。また、筋反射を感じることができるとは、特殊な能力を持つ人だけだと思っていました。ところが実際にやってみて、そういった私の先入観はすべて打ち砕かれました。相手が私に無言で質問してきても、私の体はその質問にしっかりと反応し、また私が相手の筋反射を見たときも、無言で質問をしたにも関わらず、相手の体は私にもわかるように答えてくれました。実習の最後にお互いに話し合せて、体が答えたいことは、それは、私に確認することができました。私はこの実習を通して、まず自分という一つの体の中に、無限に深く広い世界を持つ心と魂が、しっかりと取まっていることを強く感じました。そう思ったとき、私の周囲にいるすべての人の一人一人にも、同じことが言えるのだということ、人間に限らず、命を持つものはすべて three in one であること、感じずにはいられませんでした。私たちをとりまく世界は、目に見えないもの、さわって確かめられるもの、耳に聞こえるものが

は、無意識の世界に質問をすると言ってもよいでしょう。私自身、この実習を始める前は、自分が意識していないのに筋肉がいろいろなことを語るといことが信じられませんでした。また、筋反射を感じることができるとは、特殊な能力を持つ人だけだと思っていました。ところが実際にやってみて、そういった私の先入観はすべて打ち砕かれました。相手が私に無言で質問してきても、私の体はその質問にしっかりと反応し、また私が相手の筋反射を見たときも、無言で質問をしたにも関わらず、相手の体は私にもわかるように答えてくれました。実習の最後にお互いに話し合せて、体が答えたいことは、それは、私に確認することができました。私はこの実習を通して、まず自分という一つの体の中に、無限に深く広い世界を持つ心と魂が、しっかりと取まっていることを強く感じました。そう思ったとき、私の周囲にいるすべての人の一人一人にも、同じことが言えるのだということ、人間に限らず、命を持つものはすべて three in one であること、感じずにはいられませんでした。私たちをとりまく世界は、目に見えないもの、さわって確かめられるもの、耳に聞こえるものが

は、無意識の世界に質問をすると言ってもよいでしょう。私自身、この実習を始める前は、自分が意識していないのに筋肉がいろいろなことを語るといことが信じられませんでした。また、筋反射を感じることができるとは、特殊な能力を持つ人だけだと思っていました。ところが実際にやってみて、そういった私の先入観はすべて打ち砕かれました。相手が私に無言で質問してきても、私の体はその質問にしっかりと反応し、また私が相手の筋反射を見たときも、無言で質問をしたにも関わらず、相手の体は私にもわかるように答えてくれました。実習の最後にお互いに話し合せて、体が答えたいことは、それは、私に確認することができました。私はこの実習を通して、まず自分という一つの体の中に、無限に深く広い世界を持つ心と魂が、しっかりと取まっていることを強く感じました。そう思ったとき、私の周囲にいるすべての人の一人一人にも、同じことが言えるのだということ、人間に限らず、命を持つものはすべて three in one であること、感じずにはいられませんでした。私たちをとりまく世界は、目に見えないもの、さわって確かめられるもの、耳に聞こえるものが

は、無意識の世界に質問をすると言ってもよいでしょう。私自身、この実習を始める前は、自分が意識していないのに筋肉がいろいろなことを語るといことが信じられませんでした。また、筋反射を感じることができるとは、特殊な能力を持つ人だけだと思っていました。ところが実際にやってみて、そういった私の先入観はすべて打ち砕かれました。相手が私に無言で質問してきても、私の体はその質問にしっかりと反応し、また私が相手の筋反射を見たときも、無言で質問をしたにも関わらず、相手の体は私にもわかるように答えてくれました。実習の最後にお互いに話し合せて、体が答えたいことは、それは、私に確認することができました。私はこの実習を通して、まず自分という一つの体の中に、無限に深く広い世界を持つ心と魂が、しっかりと取まっていることを強く感じました。そう思ったとき、私の周囲にいるすべての人の一人一人にも、同じことが言えるのだということ、人間に限らず、命を持つものはすべて three in one であること、感じずにはいられませんでした。私たちをとりまく世界は、目に見えないもの、さわって確かめられるもの、耳に聞こえるものが

二ンカン科目と自己成長



いろいろ考えたりして、もし、その時にこの授業を受けていたならば、自分のなかが飽和状態になってしまっていたであろう。2年生の前期は、授業がいつばい詰まっていた忙しくて、頭も、心も、体もやばい状態であったが、それでもこの授業だけは楽しんでいた。もちろん、個人差がある。これは、あくまでも私個人の場合においてである。怪しげな地下のNo.3教室に広がる「まどかワールド」。彼女でなければならぬ。「各論いのちと言葉」を学生に伝授するのは彼女以外には考えられないと言ってもよいほど、「まどかのあじ」の濃いものであった。印度も、東洋医学もの、経験もの、そして意味不明なもの、本当に中身の濃い一見変わったものばかりの、興味をそそられる、不思議なひとときを私個人は満喫していた。

各論いのちとことば

2年 春馬 恭子

この授業は、2年生の前期に、2年生だけに開かれていた。それには、重要な意味があると、私は睨んでいた。

私の場合、1年生前期は人間自体受け入れられず、また、人間に

私にとって、「まどかワールド」に触れたことは、「はるまワールド」発掘への旅の始まりであったと今思う。私のなかには、今の「はるまワールド」が広がっていて、自分の脳裏には、「はるまの景色」が映っている。うれしいよ。